

# 榎物語

永井荷風

青空文庫



市外えばらごおり荏原郡世田せたヶ谷町やまちに満行寺まんぎようじという小さな寺がある。その寺に、今から三、四代前とやらの住職が寂滅じやくめつの際に、わしが死んでも五十年たった後のちでなくては、この文庫は開けてはならない、と遺言ゆいごんしたとか言伝えられた堅固な姫路革ひめじがわの篋はこがあつた。

大正某年の某月が丁度その五十年になつたので、その時の住持じは錠前じやうぜんを打破うちこわして篋をあけて見た。すると中には何やら細字さいじでしたためた文書が一通収められてあつて、次のようなことが書いてあつたそうである。

愚僧儀ぐそうぎ 生涯の行状、懺悔ざんげのためその大略を此こゝに認め置おき候そうろうもの也なり。

愚僧儀はもと西国さいこく丸まる丸まる藩はんの御家臣ごかしん深沢重右衛門ふかざわじゆうえもんと申候者もうし

の次男にて有これあり之候ふつつか。不束ふつつかながら行末は儒者とも相あいなり家名を

揚げたき心願にて有之候処、十五歳の春、父上は殿様御帰国の砌みぎり

御供廻おともまわり仰付おおせつけられそのまま御国おく詰につめになされ候よに依り、愚僧

は芝山内しばさんない青樹院せいじゆいんと申す学寮の住職雲石殿うんせきどの、年来ねんらい父上とは

昵懇じつこんの間柄にて有之候まゝ、右の学寮に寄宿つかまつ仕り、従前通り江

戸御屋敷御抱おやしきおかかえの儒者松下先生につきて朱子学しゆしがく出精まかりあり罷まかりあり在候

処、月日たつにつれ自然しゆつげ出家の念願起り来りきた、十七歳の春ていは剃

髮致し、宗学しゆぎ修業しゆぎよう専念せんねんに心懸こころがけ候間あいだ、寮主雲石殿も末頼た

母のしき者に思おぼしめ召めされ、殊ことの外ほか深切しんせつに御指南なし下され候処、

やがて愚僧二十歳に相なり候頃より、ふと同寮の学僧に誘はれ、

しながわじゆく

品川宿ぎょううの妓楼ぎろうに遊びぶっかい仏戒ぶつがいを破り候てより、とかく邪念に妨

げられ、経きやうもん文修業も追々おろそかに相なり、果はては唯うか

とのみ月日を送り申候。或夜いつもの如く品川宿よりの帰り途みち、

つれ

連の者にもはぐれ、唯一人牛町うしまちの一筋道ひとすじみちを大急ぎに歩み参候まいり

おもいほかどこ

と思の外何処まで行き候ても同じやうなる街道にて海さへ見え申

さず候故ゆえ、

これはてつきり、狐きつねのわるさなるべしと心付き足むきの向

次第と、

唯有る横道に曲り候処、いよ／＼方角を失ひ、かつはまた

ちばた

夜も次第にふけ渡り、月も雲間に隠れ候故ゆえ、聊か途法いささに暮れ、路みち

ちばた

端の草の上に腰をおろし、一心に念仏致をり候処、突然彼方かなたよ

り女の泣声聞え来り候間あいだ弥 《いよいよ》妖魔ようまの仕業しわざなるべしと、その場にうづくまり、齒の根も合はず顫ふるへをり候に、やがて男の声も聞え、人の蹙あしおと音次第に近づき来るにぞ、此方こなたは生きたる心地もなく繁しげりし草むらの間にもぐり込み、様子如何いかにうかがいと窺うかがをり候処、一人の侍無理遣さむらいりに年頃の娘を引連れ参り、隙すきを見て逃にげださむとするを草の上に引据ひきすゑ、最前よりいろく事の道理を分けて御意見申上候得そうらえども、御聞入れ無これなくそうらえ之候得者、是非なき次第に候間、このまゝ手足を縛りてなりとお屋敷へ連れ帰り、御不憫ごふびんながら不義密通うつつたえの訴もうすをなし申べしと、何やら申聞もうしきかしをり候処へ、また一人の侍息さむらいを切らして駈かけ来り、以前の侍に向ひ、今夜の事は貴殿より外ほかには屋敷中誰一人知るものも無これなき之事に候なり。われら駈か

けおちもの

落者を捕へ候とて、さほど貴殿の御手柄になり候訳にてもある

まじく候間、何とぞ日頃の誼みにこのまゝお見逃し下されよと、

袂たもとに縫ぬいり、地ひたいに額すを摺り付けて頼み候様子なれど、以前の侍一いっこ

向聞入うれ申さず。貴殿に対しては恩も恨うらみもなき身なれど、この

お小夜殿おさよどのは恩儀ある我が師の娘御むすめごなり。道ならぬ恋に迷かひ家

中ちゆうの者と手てに手てを取り駈落致したりとの噂うわさ、世よに立ち候時は、

師匠の御身分にもかゝはり申べく候。今の中うちなれば拙者せつしやの外は

誰一人知るものなきこそ幸さいわいなれ。このまゝそつと御帰宅なされ候

はゞ、親御様も上部うわべはとにかく、必手かならずひどい折檻せつかんなどはなされ

まじ。かくいふ中にも時刻移り候ては取返しの付かぬ一大事、疾と

くく拙者と御一緒にお帰り遊ばされ候へと、泣なきしず沈しずむ娘を引立

て行かむとするにぞ、一人の侍今はこれまでなりと覚悟致し候様  
子にて、突つと立上り、下手したてに出いでをれば空そらぞら々しきその意見、聞  
いてはをられぬ。ないく御嬢様に色いろぶみ文つけ、弾はじかれたを無念  
に思ひ、よくも邪魔をしをつたな。かうなれば、刀にかけて娘御  
はやらぬ。覚悟をしやれと、引抜く一刀。此方こなたも心得たりと抜き  
放ち、二、三合切ごうきりむす結ぶ中、以前の侍足を踏み滑べらせ路の片側  
なる崖がけの方かたへと落ち込む途端とたんすそ裾を払ひし早業はやわざに、一人は脚あしにて  
も斬きられ候や、しまつたと叫びてよろめきながら同じく後の崖うしろに  
落ち、路みちばた傍そばに取残されしは、娘御ひとりとなり候処、この時手  
に手に、提ちようちん灯ちん持ちたる家中の侍とも覚しき人数にんず駈かけ来り、娘  
御の姿を見候て、皆々驚うちく中にも安堵あんどの体ていにて一人の男の背に娘

御をかつぎ載せ、そのまゝもと来りし方へと立去り候一場の光景。  
 愚僧は始より終まで、草むらの中にて見定め、夢に夢見る心持に  
 て有之候。但し固より夢にては無之事に候間、とかくする中、  
 東の空白みかゝり疇を離るゝ鴉の声も聞え候ほどに、すこしは安  
 心致し草むらの中より這出し、崖下へ落ち候二人の侍、生死のほ  
 ども如何相なり候哉と、恐るゝ覗き申候に、崖はなかゝ険岨  
 にて、大木横ぎまに茂り立ち候間より広々としたる墓場見え候  
 のみにて、一向に人影も無御座候。その辺に血にても流れをり候  
 哉と見廻し候へども、これまたそれらしき痕も相見え申さず候。  
 さては兩人共崖に墜ち候が勿怪の仕合にて、手疵も負はず立去  
 り候もの歟など思ひながら、ふと足元を見候に、草の上に平打

の銀簪ぎんかんざし一本落ちをり候は、申すまでもなくかの娘御の物なるべくと、何心なく拾ひろ取り、そのまゝ一歩二歩、歩み出し候処、  
 またもや落ちたるもの有之候故ゆえ、これも取上げ候に革の財布にて、  
 大分目方も有之候故、中を改め候処、大枚の小判、数ふれば正しく百両ほども有之候。これ必ひつじよう定、駈落の侍ろうようが路用の金なるべしと心付き候へば、なほ更空恐しく相なり、後日ごじつの掛り合になり候ては一大事と、そのまゝ捨て置き立去らむと致せしが、ふとまた思おも直いなせば、この大金このまゝこゝに捨て置き候へば、誰か通がりの者に拾はるゝは知れた事なり。かつはまた金の持主は駈落者にて、今は生死のほども知れずに相なり候者故、これぞ正しく天あとうの与る所。これを受けずばかへつて禍わざわいをや蒙こうむらむと、都合

好き方へと理をつけ、右の金子財布のまゝ懐中に致し候ものゝ、  
 俄にわかに底知れず恐しき心地致し、夢が夢中にて走り出し候中、夜は  
 全く明けはなれ、その辺の寺々より鉦かねや木魚もくぎよの音頻しきりに聞え、街  
 道筋とも覺しき処を、百姓ども供高声に話しながら、野菜を積み候荷  
 車を曳ひき行くさま、これにて漸ようやく二本榎にほんえのきより伊皿子いさらごへん辺へ来かゝ  
 り候事と、方角も始はじめて判明致候間、急しばぎ芝山内しばんないへ立戻り候へど  
 も、実は今こんにち日まで、身は持もち崩くずし候てもさすがに外泊致候事は  
 一度も無之、いつも夜の明けぬ中立戻り、人知れず寢床にもぐり  
 をり候事故、今はその時刻にも遅れ候て、わが学寮へは忍入る事  
 も叶ひ申さず。かつはまた百両の金の隠し場所にも困こまり候故、その  
 まゝ引返し、とぼくと大門だいもんのあたりまで参候まいり処、突然後より、

モシ良りようじようどの乗殿いすこ、早朝より何処へお出でかと、声掛けられ、び  
つくり致し振返れば、浄光寺じようこうじと申す山内さんない末院まついんの所化しよけにて、  
これも愚僧など、同様、折々あくしよば悪所場へ出入致し候得とくねん念と申す  
坊主にて有之候。京橋まで用事有之候趣にて、同道致候道みちみち々々、  
愚僧の様子何となくいつもとは変りをり候ものと見え、何か仔細しさい  
のある事ならむと頻しきりに問掛といかけ、果は得念自身問はれもせぬに、そ  
の身の事供打明どもけ話し候を聞くに、得念は木挽町こびきちように住居致候商  
家の後家ごけと、年来道ならぬ契ちぎりを結び、人の噂うわさにも上り候ため度たびた  
々び師匠よりも意見を加へられ候由。しかる処後家の方にても不  
身持の事につき、親戚中にてもいろくもんちやく悶もん着有之候が、万一  
間違など有之候ては、かへつて外聞にもかかはり候事とて、結局

得念げんぞくに還俗にゆうふ致させ候上、入夫にゆうふ致させ申すべき趣おもむき。内談ないだんも既にきまり候つきに付、浄光寺の住職がた方へは改めて挨拶あいさつ致し、両三さん日ちちゆう中には抹香まつこう臭におき法衣ころもはサラリとぬぎ捨て申すべき由。人間若い時は一度より外無ほかこれなき之もの故、愚僧にも今の中とくと思案致すが好よいなど申し続け候。その日は得念に誘はれそのまゝ後家方かたへ立寄り候処、いろく馳走ちせうに預り候上、風呂ふろに入候処、昨夜よりの疲労一時に発し、覚えずうとくと眠ねむりを催し驚きて目を覚し候へば、日も早や晩景に相なり候故、なほく驚き、後家を始め得念にはいづれ両三日中重かさねて御礼に参上致すべき旨申し、厚く礼を陳のべ候て立出たちいで候ものゝ、山内の学寮へは弥あて 《いよいよ》時刻おくれて帰りにくく、さりとて差当り行くべき当も無之身の

上。足の向くがまゝ芝口へ出候に付き、堀端づたひに虎の門より溜池へさし掛り候時は、秋の日もたつぷりと暮れ果て、唯さへ寂しき片側道。人通も早や杜断え池一面の枯蓮に夕風のそよぎ候響、阪上なる葵の滝の水音に打まじりいよく物寂しく耳立ち候ほどに、わが身の行末俄に心細く相なり土手際の石に腰をかけ、ただ惘然として水の面を眺めをり候処、突然後より愚僧の肩を叩きコレサ良乗殿。大方こんな事と思ひし故、心配して後をつけて参つたのだ。と申し候は今方木挽町なる後家の許にて別れ候得念なり、得念は愚僧をば身投げにても致す心に相違なしといろくに申候末、あたりを見廻し急に言葉を改め、愚僧が懷中に大金を所持致すは、大方山内の宝蔵より盗みし金なる

べし。友達の誼よしみに他言は致さぬ故、半分山分けに致せと申出で候。さては最前風呂より上り、居眠り致候節見抜かれしと思ひ、昨夜の顛てんまつくわ末委しく語りきかせ、実はこれよりその屋敷を尋ね、金子きんすを返却致したき趣申聞かせ候へども、得念一向承知せず。果は押問答の末無法にも力づくにて金子を奪取うばいらむと致候間、掴つかみ合の喧嘩けんかに相なり候処、愚僧はとにかく十五歳までは武術の稽古けいこも一ひと通とは致候者なれば、遂に得念を下に引据ひきすゑ申候。得念最早かなや敵かたはずと思ひ候にや、忽たちまち大声にて人殺しだ。泥棒よびつづだと呼よびつづ続つづけ候故、愚僧も狼狽ろうばいの余り、力一杯得念が咽喉のどを締め候に、そのまゝぐたりと相なり、如何いかほど介抱致候ても息を吹返す様子も相見え申さず候故、今は如何いかんとも致しがたく、幸闇夜さいわいみよにて人ひとひとどお

通りなきこそ天の佑と得念が死骸を池の中へ蹴落し、そつと同所を立去り戸田様御屋敷前を通り過ぎ、麻布今井谷湖雲寺門前にいで申候処、当時はまだ御改革以前の事とて長垂阪上の女郎屋いたつて繁昌の折から、木戸前を通りかゝり呼び込まれ候まゝ、こゝに一夜を明し申候。誠に人間一生の浮沈は測りがたきものなり。偶然大金を拾ひ候ばかりに人殺の大罪を犯す身となり果候上は、最早や如何ほど後悔致候ても及びもつかぬ仕儀にて、今は自首致して御仕置を受け申すべきか。さらずば、運を天に任せて逃げられ候処まで逃げ申すかの二ツより外に道は無之候。今更懐中の金子を道に棄て行き候とも、人殺の罪は免れぬ処と、夜中まんじりとも致さず案じ累ひ候末、とにかく一先候

地へなり姿を隠し、様子を窺ひ候上、覺悟相定め申べしと存じ、  
 翌朝麻布の娼家を立出で、渋谷村羽根沢の在所に、以前愚  
 僧が乳母にて有之候お薦と申す老婆。いたつて実直なる農婦にて、  
 二度目の婿を取り候後も、年々寒暑の折には欠かさず屋敷へ見舞  
 に参候ほどにて、愚僧山内の学寮へ寄宿の後も、有馬様御長屋  
 外の往来にて、凶らず行逢ひ候事など思ひ浮べ、その日の昼下  
 り、同処へ尋行き申候。思の外手びろく生計も豊かに相見え候の  
 みならず、掛離れたる一軒家にて世を忍ぶには屈 竟の処と  
 存ぜられ候間、お薦夫婦の者には、愚僧同寮の学僧と酒の上口論  
 に及び、師の坊にも御迷惑相掛け、追放同様の身と相なり候に依  
 り、一先国許へ立退きたき考なれば、四、五日厄介になりた

き趣を頼み候処、心好く承知致しくれ候故、ゆつくり疲労を休め、  
縞しまの衣服、合羽かつぱなど買求め候得そつらえども、円き頭ばかりは何とも致い  
たしかたござなく、方無御座候間、俳諧はいかいし師かまたは医者ていの体よそおに粧よそおひ、旅の支度万  
端とゝのひ候に付き、お蔭夫婦の者に別れを告げ、教へられ候道  
を辿たどりて、その夜は川崎宿かわさきじゆくに泊り申候。しかしながら始より  
国許へ立帰り候所存とては無これなきこと之事に候間、東海道を小田原おだわらまで  
参り、そのまゝ御城下に数日滞在の上、豆州ずしゅうの湯治場を遊び廻  
り、大山おおやまへ参詣さんけい致し、それより甲州路へ出で、江戸に立戻ら  
むと志し候途中、凶らず道づれに相なり候は、これ即ち当山とうざん満  
行寺んぎょうじ先代の住職了善上人りょうぜんしやうにん殿にて御座候。殊の外愚僧を愛  
せられ、是非とも満行寺に立寄れよと御勧おすすめなされ候により、そ

のまゝ御厄介に相なり候処、当山は申すまでもなくにしほんがんじは西本願寺派おつれ  
まるまるし丸円寺の分れにて、肉にく食じき妻帯の宗門なり。了善上人には御あいつ  
あい連合も先年じやくめつ寂滅なされ、娘むすめご御お一人御座候のみにて、法ほ  
うし嗣うしに立つべき男子なく、遂に愚僧を婿むこ養よう子しになされたき由申出  
うちされ候中、急病にて遷化せんげ遊ばされ候。尤ももつとこれは愚僧とうざん当山とうざんの厄  
 介ごけいに相なり候てより三年の後にて、愚僧は御遺言ごゆいごんに基もとづき当山八  
 代目の住職に相なり候次第にて有之候。これより先、愚僧はかの  
ずしゆう百両の大金、豆州わづかの湯治場を遊び廻り候ても、僅拾両わづかとは使ひ  
ほとんど申さず。殆ほとんどそのまゝ所持致しじをり候事故、当山の御厄介に相なり候  
 に付いては、またもやその隠場かくし所に困りかをり候処、唯今ただいまにても当  
おもてそうもん寺表惣門かたわらの旁かたわらに立ちえのきをり候榎えのきの大木おほきに目をつけ、夜中やちゆうよじ攀のぼ

上り、幹の穴に隠し置き申候。さて先代御成仏ごじょうぶつの後は愚僧住職の身に御座候へば、他たしゆつたぎよう出他行も自由気儘きままに相なり候故、夜中再び人知れずかの大木に攀上り、九拾両の中四拾両ほど取出し、残り五十両はそのまゝもと旧の通り幹の穴に隠し、右の四拾両を以て、一時妾めかけを囲ひ、淫楽いんらくに耽ふけりをり候処、その妾も数年にして病死致し、続いて先代住職の形見なる梵妻ぼんさいもとかく病身の処これまた世を去り申候。その時は愚僧もいつか年四十を越し、檀家中だんかの評判も至極宜よろしく、近郷の百姓じよも供一同愚僧が事を名僧知識のやうに敬ひ尊び候やうに相なりをり申候。何事も知らぬが仏とは誠にこの事なるべく候。それにつけても月日経ち候につけ、先年溜ためい池けにて愚僧が手にかゝり相果て候かの得念が事、また百両の財

布取とり落おとし候侍さむらいの事も、その後は如何いかに相なり候哉やと、折々夢にも  
 見み申候間、所用にて江戸表へ参り候節はそれとなく心を付けを  
 見み申候間、所用にて江戸表へ参り候節はそれとなく心を付けを  
 り候へども、一向にこれと申すほどの風聞も無之模様にて、更に  
 様子相知れ申さず候故、次第に安心も致すやう相なり候事に御座  
 候。なほまた愚僧が先年寄宿まかり罷あり候芝山内青樹院の様子につき  
 ては、その後聞き及び候処によれば、愚僧突然行衛ゆくえ不明に相なり  
 候に付き、その節学寮にては、心あたり漏れなく問合せ候ても一  
 向に相知れ申さず候につき、殺され候歟か、または神隠しにでも遇あ  
 ひ候歟、いずれにも致せ、不憫ふびんの事なりとて、雲石師うんせきしは愚僧が  
 出しゅつ奔ぽんの日を命日と相定め、寮内に墓まで御建てなされ候趣に  
 御座候。さて、愚僧は右の如く僅わずか一、二年の間に妻さい妾しやう兩人共

喪うしなひ申候に付き、またもや妾を困ひたきものと心には思ひをり候  
ものゝ、早ふんべつぎや分別盛の年輩に相なり候ては、何となく檀家を  
始め人の噂うわさも気にかゝり候て、血氣の時のやうに思切つた事も出  
来兼ね、唯折ただもあらばと、時節をのみ待ち暮し申候。時々は遠か  
らぬ新しんじゆく宿へなりと人知れず遊びに出掛けたき心持にも相なり  
候へども、これまた同様にて埒らち明き申さず。空しく門前の大木を  
打仰ぎ候て、幹の穴に五拾両有之候上は、時節到来の砌みぎりは、如何  
なる浮世の楽しみも思ひのまゝなる身の上。別に急ぎ候には及ば  
ぬ事と我慢致し月日を送り申候。人間の慾心は可笑おかしきものにて、  
いつにても思ひのまゝになると安心致をり候時は、案外我慢の出  
来るものにて有之候。唯心にかゝり候事は、風雨雷鳴の時にて、

門前の大木万一風にて打折らるゝか、または落雷に碎かれ候て隠かくしおき

置

候大金、木の葉の如く地上に墜おち来り候やうの事有之候て

は一大事なりと、天氣宜よろしからざる折には夜やちゆう中にも時折起出おきいで、

書院の窓まどを明け、大木の梢こすえを眺め候事も度々にて有之候。とかく

する中、数かずれば今より十余年ほど前の事に相なり候。彼岸ひがんも過ぎ

て、野も山も花盛りに相なり候頃ころ、白はくちゆう昼俄に風雨吹起り、近

村へ落雷十余箇処にも及び候事有之。当山門内の大榎さいわいは、幸にも

無事にて有之候ひしかど、その後兩三日にちは引続き空曇りて晴れ申

さず。またあらし嵐来り申すべくなど人々申をり候を聞き、愚僧心

痛一方ならず。深夜そつと起き出で、大金を取出し置かむものと、

大木の幹に登りかけ候処、血氣の頃には猿ましらの如くするよじくと攀よじ

昇ぼり候その樹きの幹には変りはなけれども、既に初老を過ぎ候身は、いつか手足思ひのまゝならず、二、三間げん登り候処にて片足を滑らせ、そのまゝどう、瞳とばかり地上に墮おち申候。静しずかなる夜にて有之候はゞ、この物音に人々起出おきいで参り大騒ぎにも相なるべきの処、幸さいわいにも風大分はげ烈ふきしく吹いで候折とて、誰一人心付き候者も無之。愚僧は地上に落ち候まゝ、殆ほとんど氣絶も致さむばかりにて、漸ようやく起おきなお直り候ものゝ、烈しく腰を打ち、その上片足を挫くじき、四よツ這ばいになりて人知れず寢しんじよ所へ戻り候仕末。その夜は医者を呼び迎へ候事も叶かなひ申さず。翌朝に至るを待はち始はじめて療治を受け申候。それより時候の変かわり目めごとに打身に相悩み候やうに相なり、最も早はや二度とはかの大木には登れそうにもなき身に相なり申候。左候得者さそうらえは、

樹上の大金は再び手にすることも出来兼候かねわけなり。人に頼めばわ  
 が身のむかしを怪しまるゝおそれ虞有之。かの五拾両は樹上に有之候と  
 も、最早やわが身には生涯何のやくにも立たざる物になり候よと  
 思へば、満身の氣力一時にぬけお抜落ち候やうなる心地致され、唯ぼうぜ惘  
 然んとして榎の梢を眺め暮すばかりにて有之候。今までは一向氣  
 にも留めざりしからす鴉の鳴声も、かの大木の梢に聞付け候時は、和おしよ  
 尚うめ奴、ざま見ろ。いゝ氣味だとちやうろう嘲 弄 致すものゝやうに聞き  
 なされ、秋あきぜみ蟬の鳴きしきる声は、惜しよ惜しよ。御ご愁 傷 と  
 いふやうに聞え候て、物寂しき心地致され申候。雨あがりの三日みか  
 月づき、夕焼雲のたなび棚曳くさまも彼のか大木の梢に打眺め候へば誠しよぎに諸  
 行無常ようむじようの思ひに打たれ申候。しかしながらいかほどなげ嘆き候て

も、もとくわが身の手にて隠し候金子きんす。わが身の手にて取出す力なくなり候事なれば、誰を怨むにも及ばざる事に候間、月日をふ経るに従ひ、これぞ正まさしく因果応報いんがの戒いましめなるべくやと、自然に觀念致すように相なり申候。とにかくに半金の五拾両は面白可笑おかしく遣つかひ棄すて候事なれば、唯今の中諦うちあきらめを付け申さず候ては、思ひもかけぬ禍わざわいを招まねぐも知れずと、樹上の金子の事はきつぱり思切るやうにと心掛しけ申候。然しかる処かまたく別かんがえの考かいつともなく胸きょううち中ゆうに浮うび来り申候。それは彼の金子今も果して樹上の穴あなに有あ之候哉や否や。愚僧の心付こころづかぬ中盗うちみ去りし者は無な之候哉と、この事ばかり気にかゝり候て、一応金の有無だけはしかと見定め置きたき心地致し候。次にはまた、もし彼の金子今以て別条無これなき之にお

いては、天下の通宝つうほうを無用に致し置くわけ訳なれば、誰なりと取出し、勝手に遣へばよきものをといふ心にも相なり申候。但し軽々しく口外致すべき事には無御座候間ごぎなくあいだこれまたそのまゝに致し、唯たゞ時節の来るを待ちをり申候処、或日の事、当村の庄屋しょうやどの殿より即刻代官所へ同道致されたき趣おもむき、使を以て申越され候間、直すぐさ様参り申候処、御役人御出有之おいで其許方そのもとかたに慶蔵と申候寺てら男おとこ召使ひ候事有之候哉との御尋おたずねなり。御仰おおせの通り昨年冬頃まで召使ひ候旨御答申上候処、御役人申され候には、かの慶蔵事新しん宿しゆく板橋辺いたばしへんの女郎屋じよろうやにて昨年来身分不相応の遊興致し候のみならず、あまつさへ大金所持致しをり候故ゆえ、不審の廉かどを以て吟ぎ味致し候処、右慶蔵申立て候処によれば、慶蔵事盗み候金子は満んみ

行寺境内に有之候こそだてじぞうそん子育地蔵尊さいせんの賽銭ばかりにて、所持の大金は以前より満行寺門内の大木の穴に有之候もの、由にて、当夜慶藏事地蔵尊の賽銭を盗み取りこれを隠し置かむと存じ、門内の榎に登り候処、何時頃何者の隠し置き候もの歟か、幹の穴には五拾兩の大金差込み有之候を、慶藏凶らず見付出し、寺方へはそれとなひまく暇を取り候趣申立て候おもむき得どもなほ不審の廉かど少なからざるにつそうつらえき、一応住職に聞たゞし候上うえ、江戸表へ送り申すべき手筈なりとの事に御座候。愚僧は大に驚き慶藏の申開きにはいさゝかの偽りこれなきむねも無之旨申述べたくは存じ候もの、然らば樹上の五拾兩は誰が隠し置き候哉と御詮議ごせんぎに相なり候ては大変なりと、何事も申上こふしんぐみげずそのまゝ立帰り申候。当村はその時分小普請組御支配綱つなじま島

うきようさま  
 右京様 御領分にて有之候間、寺男慶蔵は伝馬町御牢屋へ送ら  
 れ、北の御奉行所御掛りにて、厳しく御吟味に相なり候処、慶  
 蔵事十余年前 麴町辺 通行の折拾ひ候処 隠場所にこまり当山  
 満行寺へ住込み候を幸、大木へ上り隠し置き候旨申立て候由。勿  
 ちろん  
 論この儀は拷問の苦痛に堪へかね偽りの申立を致候事なれど、  
 いづれに致せ、賽銭を盗み候儀は明白に御座候間、そのまゝ入  
 牢と相きまり候処、十日ばかりにて牢内において病死致候。右  
 の次第につき、五拾両の金子は慶蔵の遣ひ残り式拾両余り有之候  
 処、右は愚僧御呼出しの上落し人明白に相なり候時まで当山にお  
 いて、しかと御預り致すべき趣にて、そのまゝ御下げ渡しに相な  
 り候。これにて愚僧が犯せる罪科の跡は自然立消えになり候事と  
 たちぎ

て、ほつと一息付き候ものゝ、実はまんまとわが身の悪事を他人に塗付け候次第に候間、日数経候につれていよいよ寢覚あしく、遂に夜なく、恐しき夢に襲はれ候やうに相なり候間、せめて罪つみほ滅ろぼしにと、慶蔵の墓のみならず、往年溜池にて絞殺し候浄光寺の所化得念が墓をも、立派に建て、厚く供養は致し候へども、両人が怨念おんねんなか／＼退散致さざるものと見え、先年大木より滑り落ち候時の打身うちみその年の秋より俄にわかに烈しく相なり候上、引き続き余病もいろ／＼差加さしくわはり、一日起きては三日ほど寝ると申すやうなる身体からだになり果て候。この分にては到底元の身体には本復致すまじくやと覚束おぼつかなく存ぜられ申候。増して年も追々おいおい六十に迫り候老体の事に御座候へば、いづれにも致せ、余命のほど

は最早いくばや幾くも無之事と観念致をり候間、せめて今の中懺悔ざんげのあらまし認め置きたく右の通り書き続け申候也。なほ以て当山満行寺住職後継あとつぎの件につきては別紙に委細落ちなきやう認め置き申候。なほく愚僧実家の儀に付きては、往年三縁山学寮出奔さんえんざんの方、何十年音信不通に相なり候間、これまた別簡一封認め置申候也。以上。南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。慶応 年 月 日。  
 武州荏原郡荏原村。円光山満行寺住職 釈良乗書。

昭和四年三月稿 昭和六年二月訂正



## 青空文庫情報

底本：「雨瀟瀟・雪解 他七篇」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年10月16日第1刷発行

1991（平成3）年8月5日第6刷発行

底本の親本：「荷風小説 六」岩波書店

1986（昭和61）年10月9日

初出：「中央公論」

1931（昭和6）年5月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※表題は底本では、「榎《えのき》物語」となっています。

入力：入江幹夫

校正：酒井裕二

2018年3月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 榎物語

永井荷風

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>